

日本地すべり学会 第63回研究発表会 県民講演会
2024年9月17日(木) 於 仙台国際センター

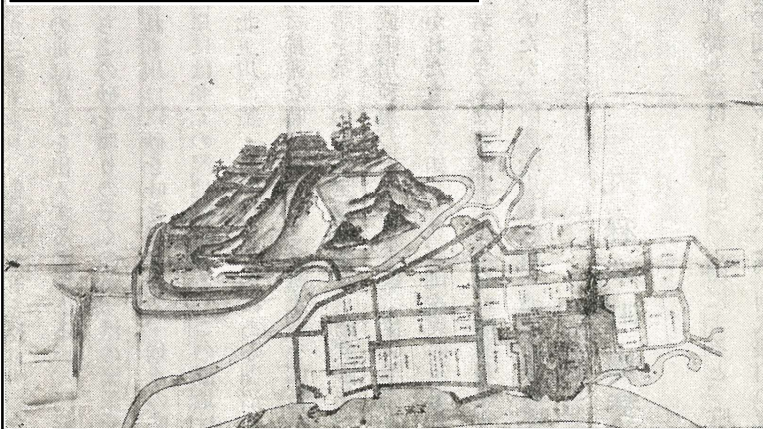
災害の歴史性

～宮城県阿武隈川流域の歴史から考える～

東北大学災害科学国際研究所
災害人文社会研究部門 歴史文化遺産保全学分野
准教授 川内 淳史

1. 丸森「城下町」の形成
2. 水害の多発と「町場替」
3. 2019年東日本台風被害との関連
4. 丸森町の変化と災害リスク

「伊具郡丸森村佐々伊賀在所絵図」(宮城県図書館蔵、「宮城県史6土木」(1957、宮城県)より)



1 丸森「城下町」の形成

1. 丸森「城下町」の形成

戦国～江戸時代初頭の丸森

- ・ 天文17年(1548) 伊達植宗(政宗の曾祖父)の隠居城として丸山城築城
- ・ 元亀元年(1570) 相馬氏の所領となり、門間大和が丸山城主となる
- ・ 天正12年(1584) 伊達・相馬の抗争の末、伊具郡は伊達領に
- ・ 天正16年(1592) 黒木宗元(旧相馬家臣)が丸山城主となる
- ・ 天正17年(1593) 黒木宗元に代わり、高野親兼が丸山城主となる

伊達―相馬抗争の最前線としての丸山城

- ・ 慶長6年(1601) 大條実頼(大條宗家・二男)が丸山城主となる
- ・ 同 年 大條実頼が阿武隈川沿いに鳥屋館を築いて移る

- ・ 以後、大條氏→山口氏→遠山氏→佐々氏と変遷
- ・ 丸山城→鳥屋館に領主拠点が移動

1. 丸森「城下町」の形成

鳥屋館を中心とした「城下町」の形成

千葉正樹「在方城下町をめぐる論点と展望—仙台藩領丸森町場の事例から—」『年報都市史研究』9号、2001より

- ・居屋敷（鳥屋館）を中心に、同心円状に除屋敷（家臣屋敷）を配置
- ・重臣の除屋敷は居館下の微高地にあり、内堀と堀で囲まれた内郭部を構成。内堀のすぐ外に下級家臣の除屋敷がある
- ・その外側に足軽や町人の屋敷地を配置
- ・町人の屋敷地は本町と横町に分かれ、木戸類似の「町切」で仕切られる
- ・下級家臣、預給主、足軽、町人の屋敷が、川、土手、堀で囲まれた外郭部を構成

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> IRIDeS

5

1. 丸森「城下町」の形成

鳥屋館を中心とした「城下町」の形成

鳥屋館「城下町」は、東端を字神明、西端を字除、南端を国道113号線と県道45号線を結ぶ町道の範囲内

現在の町役場周辺はもちろん、伝統的な町並みのある「斎理屋敷」周辺も、城下町の外側に位置する

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> IRIDeS

6

斎理屋敷(丸森町)

2 水害の多発と「町場替」

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> 7 IRIDeS

7

2. 水害の多発と「町場替」

江戸時代（1603～1868）の仙台藩内での水害

仙台管区気象台編「宮城県気象災異年表（抄）」（『丸森町史』所収）による
江戸時代・仙台藩領の水害発生件数

年次	水害発生件数
1603～1620	1
1621～1640	5
1641～1660	9
1661～1680	2
1681～1700	8
1701～1720	9
1721～1740	10
1741～1760	9
1761～1780	14
1781～1800	14
1801～1820	14
1821～1840	21
1841～1860	17
1861～1868	6

- ・265年間で約140回の水害発生（ほぼ2年に1回の割合）
- ・このうち、丸森に被害を与えた水害の数は不明だが、「土木工事の進んだ現在の堤防のある今日とは異なり、せいぜい土手程度の堤防であるから、流域の広い阿武隈川が増水すれば必然的に内川に逆流し、両河川から挟撃されることは再々であった」（『丸森町史』）

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> IRIDeS

8

2. 水害の多発と「町場替」

18世紀前半の水害とその対応 (千葉2001)

- 享保16年(1731)2月の足軽十六人組からの願書
 - 居住地が阿武隈川、内川に近接し、町場よりも低い場所があった
 - 正徳4年(1714)から享保15年(1730)秋にかけて数度の洪水に遭い、家屋が流失してしまう
 - 居住地が窪地にあるため、土手が切れなくても水が溜まってしまふ
 - 領主と足軽と共同で土手普請を行ったが、その結果、阿武隈川・内川とも天井川化してしまった
 - そのため、少しの増水でも土手が支えきれなくなってしまった
 - そのような事情のため、「菱河内屋しき辺」(現在の字菱川内、丸森小学校の上)へ所替をさせてほしい
 - 同様の移転願は、預給主、町人からも出される
- 【参考】願書が提出される前年の享保15年(1730)2月、丸森城下町で大火が発生、190戸が焼失。なおその後、享保19年(1735)12月にも大火で105戸焼失。

↓

- 出入司(仙台藩の財政総括責任者)は「川除土手」の増高と「悪水」を抜くための水門の増倍で居住可能と判断、享保19年(1734)までに対策工事を実施
- しかしながら、その後も洪水被害は終息せず、明和6年(1796)8月の洪水では、町屋敷17~8軒が押し流され、死者26名・馬6匹の被害(西円寺境内に供養塔あり)

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> IRIDeS

9

2. 水害の多発と「町場替」

水害対策としての経済活性化策とその失敗 (千葉2001)

- 寛政10年(1798)の「丸森村馬市場廃止願」
 - 寛政5年(1793)に水難で苦しむ「馬町場」の「御救」のため、肝入が「駄日市」開設を願い出る
 - 藩より年50日開催の認可が出るも、隣の角田で同様の認可があり「不盛」となる
 - 寛政8年(1796)に日数を20日に減らすように願い出、翌年、20日開催したが、同様に「不盛」となる
 - 結局、町場役人より廃止を願い出、藩より認可されて終わる

↓

- その後も続く洪水被害に対する経済活性化策としての市の開設も、周囲との競争に敗れ、失敗に終わる

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> IRIDeS

10

2. 水害の多発と「町場替」

寛政11年9月水害と「町場替」 (千葉2001)

- 寛政11年9月7日(新暦10月5日)夜、大風雨のため洪水発生、丸森町場の土手を押し切り、家屋が流失
- 「住居不叶」状態となったため、「願」を出して町場を引き移す
- 「佐々和泉俊定へ請の如ク水難ノ避テ采邑を伊具郡丸森町へ移スヲ許ス」(「六代治家記録」寛政12年3月29日条)
- 町場替の公認以前に「勝手」な移住も行われ、すでに「丸森町」と呼べる状況が成立していた。
- また「勝手」な移住に対して、「奉公人前地主」より「不服」の願書が数十度に及ぶ

↓

- 移転事業は享和元年(1801)より着手され、享和4年(文化元年、1804)に完了
- 事業のための入夫のべ12,761人のうち、町人負担は2,000人(16%)、伊具郡もしくは領主への「役」を充当したのが5,380人(42%)、領主あるいは仙台藩の負担が5,380人(42%)
- 工事指揮と空間計画は仙台藩の普請方が担当
- 工事完了に先立つ享和3年(1803)に、町人より「丸森村新船場願」が出され、商業上の理由より船場を神明より新しい町場の北側に移して欲しいと願い出され、許可される
- 足軽町は新しい町場ではなく、従来の「集住型」を解体し、山側に「散村型」へと移る

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> IRIDeS

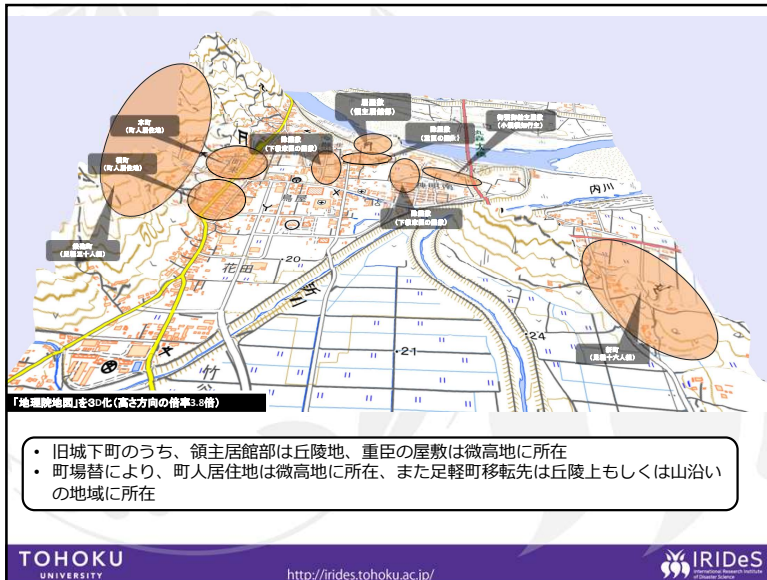
11

2. 水害の多発と「町場替」

「町場替」後の丸森中心部の空間

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> IRIDeS

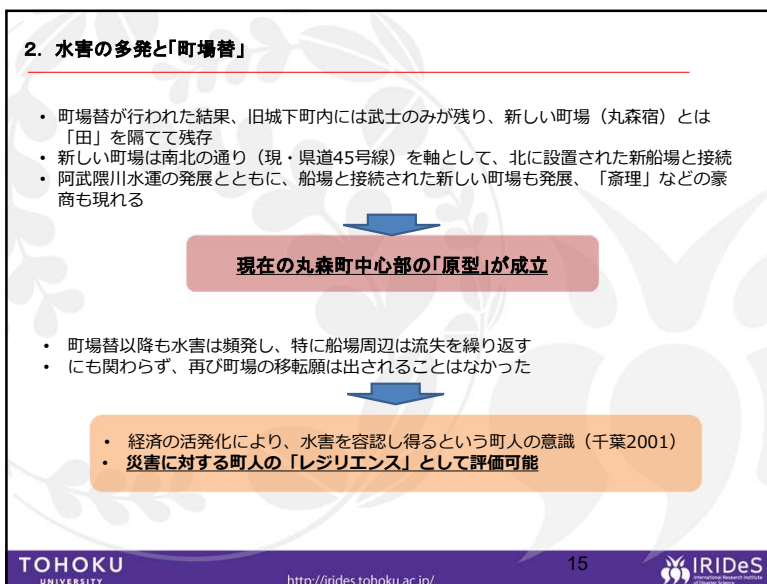
12



13



14



15



16



17



18



19



20



21

3. 2019年東日本台風被害との関連

丸森中心部の空間編成と被害の関係

旧城下町部

- ・ 微高地に所在する「内郭部」では浸水被害等は確認されなかった
- ・ 一方、それより低地の町人町・足軽町などでは1.5m程の浸水被害

「身分制社会」における階層差と災害リスクの関係

新町場部

- ・ 町場西側の丘陵地より沢水・土砂の流入、足軽町移転地では土砂崩落の被害も
- ・ 丘陵地下の新町場部では20cm程の浸水被害
- ・ 新町場部に流入した水は、さらに東の低地（町役場周辺）へと流れ込んだ模様

- ・ 19世紀初頭「町場替」時の空間編成が、災害リスクを低減する効果を発揮
- ・ 一方、近代化の過程で、リスクを引き受ける場所（遊水地）が開発の対象とされる

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> 22 IRIDeS

22



4 丸森町の変化と災害リスク

23

4. 丸森町の変化と災害リスク

旧城下町のその後

・ 角田県から明治新政府への上申書（明治4年1月、「太政類典」第一編第七十五巻）

- ・ 角田県の管轄する磐城国伊具郡丸森村、巨理郡坂本本郷、陸前国柴田郡岡村、村田郷、前川村の内川崎などに仙台藩士族の邸宅があるが、一昨年の戊辰戦争により武士が仙台へ移り、その後長く居住していないため、雨漏などで朽損大破となっている。
- ・ また、昨年9月の大風によって吹き倒れてしまっているものもある。
- ・ そのため、相当の価格をもって希望する者へ払下げたい。また跡地は五町歩以下となるので、かねてお逢しの通り開拓をしたい。

↓

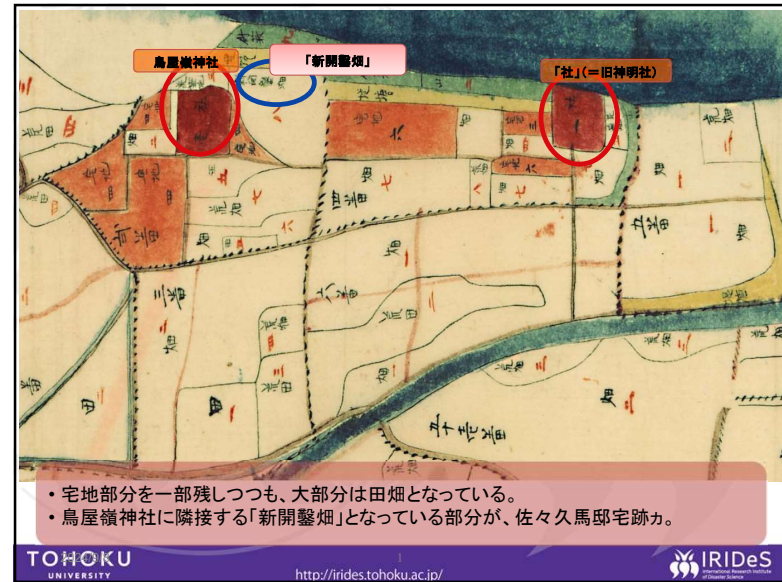
- ・ 丸森での払下げ対象は「佐々馬旧邸」（領主佐々馬の屋敷跡）、居家4軒・土蔵2ヶ所・門一ヶ所
- ・ なお戊辰戦争後、丸森にいた武士の中には、領主佐々氏が所有していた「笹新田」（現・仙台市若林区荒井笹屋敷）へと移り、土着帰納した者もいた模様（『宮城県史8 土木編』）。
- ・ 戊辰戦争後に武士が去って放棄・荒廃した武家屋敷は、明治3年9月の台風（後述）により大きな被害を受け、屋敷地が払下げ、桑畑などとして開拓された。

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> 23 IRIDeS

24



25



26

4. 丸森町の変化と災害リスク

近代化と丸森町の空間変遷（1908年）

- 1889年（明治22）町村制施行により「丸森村」、1897年（明治30）町村制施行により「丸森町」となる
- 旧城下町内の足軽町・町人居住地（外郭部・低地）は桑畑となっている
→町場替以後発展した丸森の養蚕業を支える
- 当時の町役場は、新町場の南端（現・丸森町商工会議所の場所）に所在
- 現町役場周辺は水田地帯
cf. 地元住民からの聞き取りでは、「水田にもならないような湿地帯」とも

TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> IRIDeS

27

4. 丸森町の変化と災害リスク

近代化と丸森町の空間変遷（1952年）

- 1954年（昭和29）に丸森町・金山町・大内村・大張村・耕野村・小斎村・館矢間村・筆甫村が合併し、新設「丸森町」成立（地図は合併直前）
- 明治期より町場はやや拡大するものの、基本的な構造は変化せず
- 1906（明治39）より内川から西丸森町（現在の町役場周辺以南の平地部）で耕地整理事業が実施され、1910年（明治43）に整理地を七反町・柳東・銀杏・日向・柳・竹谷・飯泉・土橋・雁歌・花田・鳥屋・除・千刈場・愛宕田の14の字に再編

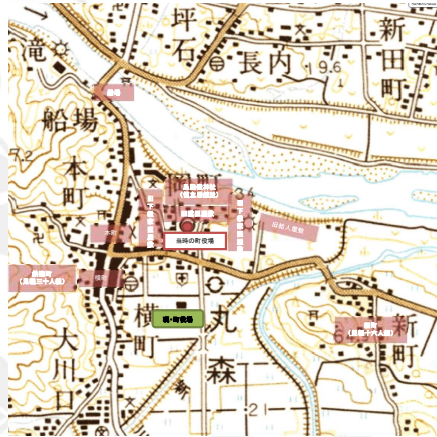
TOHOKU UNIVERSITY <http://irides.tohoku.ac.jp/> IRIDeS

28

4. 丸森町の変化と災害リスク

近代化と丸森町の空間変遷 (1977年)

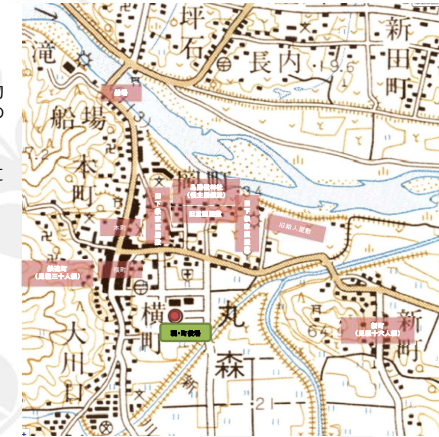
- 町役場は、丸森宿南端より、旧城下町内へ移転（現在のJAみやぎ仙南丸森支店の隣接地、1957年）
- 1970年（昭和45）に国道113号線の終点が福島県相馬市に変更され、丸森町も沿線となる
- 国道113号線は、角田方面から舘矢間を通り、丸森橋を渡って本町へ入り、旧城下町南端の道（現・国道113号線と県道45号線を結ぶ道路）を通り、金山方面へ抜けるルート
- 国道となった旧城下町南端の道を越えて、南側に町立病院や電話局、郵便局など、公共機関が進出する
- 1972～80年にかけて、神明町営住宅の建設が行われる



4. 丸森町の変化と災害リスク

近代化と丸森町の空間変遷 (1990年)

- 町役場が現在地へ移転（1986年8月）
- 町役場周辺の道路が整備され、建造物が増え始める（モータリゼーションの進展に対応?）
- 消防署が旧城下町の町人居住地付近に設置される



4. 丸森町の変化と災害リスク

近代化と丸森町の空間変遷 (現在)

- 町役場周辺に消防署が移転し、建造物が増加する
- 町中心部の車輛混雑緩和のため、2012年（平成24）に国道113号線舘矢間バイパス（丸森大橋を含む）が開通し、幹線道路が東に移り、旧城下町が分断される
- 旧城下町東部の桑畑部分も宅地化



まとめ

- 鳥屋館を中心に形成された丸森城下町は、足軽や町人など、身分階層の低い人びとは高い水害のリスクにさらされた。
- 人びとは水害のリスクを克服すべく、領主に対して移転の嘆願を何度も出し、時には勝手な移住などを行った。
- その結果、寛政11年の水害に際して移転の願いが仙台藩に聞き届けられ、町人・足軽の移転が行われた。その際、移転事業は仙台藩の主導によって行われた。
- この時の「町場替」は、現在の丸森の「原型」を形作るものとなった。また、「町場替」と同時期に実施された船場の移転による経済発展は、丸森の人びとの水害への「レジリエンス」を養った。
- その後、高度経済成長期以降の開発は、丸森の町の形を変えた。近代的な空間の再編成は、新たな災害リスクを生み出した。